

小説半導体戦争（九）

杉田望

9 経歴不詳

1

タイの首都バンコックから車でシャム湾に向かつて南西に百五十キロほど行ったところに、タイでも有数のリゾートとして知られるパタヤビーチがある。

シャム湾に面し四キロほど弓状に広がった海岸が、パタヤビーチと呼ばれている。

南国の強い日差しがパタヤビーチの白砂を焼き上げている。午後のパタヤビーチの海岸には人影は少なく、ひっそりと静まりかえっていた。

以前はタイ王族の別荘地として拓かれた静かなリゾートだったけれども、パタヤビーチがリゾートとして知られるようになったのはベトナム戦争以後のことであり、ベトナム戦争当時米軍の帰休兵士が休暇を利用して押しかけるようになってから歓楽地として急速に発展した観光地である。賭博、売春、麻薬と暴力。

ここには男たちの刹那的な欲望を満足させるすべてが揃っている。が、深刻な不況のせい、観光客の姿は少なくなり、歓楽地として脚光を浴びたパタヤビーチにはうらさびれた影が漂っていた。

その日もやはりパタヤビーチ海岸には人影は少なく、レンクル・ウインド・サーフィンの店の前では、少年たちが所在げなくあてもない客待ちをしている。ガラスのかけらを宝石だと、すぐにわかる嘘をいって、観光客を執拗に追いかけているのは、これも年端もいかぬ子供たちだ。

メインストリートのパタヤビーチ通りを海岸に沿って、サウスーパクヤ



地区の方向に向かって歩くと、グラント・パレス・ホテルが見えてくる。ビーチの南端崖の上に立つグラント・パレス・ホテルは眺望のよいことで観光客を引き付けている。そのホテルのなかでも最も眺望のよいコンファレンス・ルームでは、『世界経営技術協会』が主催するセミナーがちょうど始まるうとしているところだった。

会場にはきっかり五十六の椅子が用意されていた。

ゆつたりとした椅子に世界的に名の知れた半導体メーカーの会長であるとか、社長であるとかが、神妙な顔で座っている。イギリス、フランスそれに西ドイツの半導体メーカーの経営者の顔もある。米国の経営者たちは屈託なく足を組み上げて、会議が始まるのを待っている。中央のチェアマンの席には油断のない目くばりをしてウィリアム・スコットが座っている。スコット社長はほとんど白くなった頭髪をオールバックに撫で上げ、細面の顔に金縁の眼鏡をかけている。見た感じは学者の風貌だが、ときおり鋭い視約を走らせるところは、紛れもなく一級のビジネスマンの顔だ。日本人の経営者グループは遠慮がちに窓を背にして座っている。

出席者にはコンファレンス用の資料はなにも配られていないし、会議中にメモをとるのさえ遠慮願いたいと事前に事務局からの通達が回ってきていた。ウィリアム・スコットの隣に座っているのがレオセン社のリチャード・リー社長である。リチャード・リーはアメリカのトップビジネスマンにしては珍しく、でっぷりと太り、突き出した腹を太いバンドで窮屈そうに締め上げている。先ほどから二人は何事かひそひそと話をしている。スコット社長が大きくうなずくと、今度はバローズ社のフィリップ・コトラー社長に向かって一言二言呟いた。その奇妙なやりとりをヨーロッパの代表たちは注意深く見守っている。

フィリップ・コトラー社長はまだ五十代半ばのようで、いかにも切れ者といった風貌を持った男だ。大円形の会議用のテーブル中央に陣どるいずれの面々も、反トラスト法違反で日本企業を相手に私的訴訟を行っている連中である。コトラーはスコット社長に意味ありげな笑いを返すと、やおら立ち上がった。

実は、セミナーが開催されるのに先立って、昨夜は簡単なパーティが開

かれた。主催者であるスロットは会場のなかを廻り、出席者に愛想よく声をかけたりしていたが、肝心なセミナーの内容に関しては一言も触れなかった。パーティーは盛り上がりを欠いたまま早々と終わり、各々は用意された自分の部屋に引き取ったのだった。

日本の経営者たちはパーティーが終わったあと、東洋電気の寺坂信彦社長の部屋に集まり、今度のセミナーにどのような方針で臨むか、改めて対応策を協議したりしたが、対応策といっても相手の考えていることがわかっていないのだから、ここでも議論は空転を続けた。業界では最長老の寺坂信彦東洋電気社長は目をつぶったままみんなの議論を聞き入っているだけだった。

日興製作所からは坂本実社長が参加しているが、発言は慎重だった。酒量が上がっていたせいも、一人で喋りまくっていたのが東京通信機の内藤正好社長だった。日本の出席者としては最も歳の若い日浦の西村俊一社長はアイスボックスから氷を出し、水割りを作るなどして、先輩社長たちの話を聞いている。それにしても世界中で最も忙しい男たちが、このパタヤビーチに三日間も足止めを食らい、目的も明らかにされていない会合のために集まっているとは、改めてウィリアム・スコット社長の実力のほどを思い知らされる。



東京通信機の内藤社長がひとしきりウィリアム・スコット社長の人物評をユーモアを交えながら話していた。スコット社長は一代でモトラム社を世界有数の半導体メーカーに育て上げた努力型の人間だが、経歴にもうひとつはつきりしないところがある不思議な人物なんだと、内藤社長はいった。

もともとスコット社長は米陸軍のエンジニアを育てるウエスト・ポイントの出身といわれ、若くして陸軍を退役後、ペンチャー・キャピタルに転じ、現在のモト

ラム社を育て上げたというのが世間で知られている彼の経歴である。肩書は、未来学会理事であるとか、全米電子工業会理事、ビジネス組織計画委員会の常任委員、米国ミリタリー・ポート常設委員会の副委員長や民主党のハイテク政策委員会顧問団の常任メンバーであるとか、それは華やかである。今回のパタヤビーチ・コンファレンスを主催することになった『世界経営技術協会』は彼自身の自己紹介によれば、ウィリアム・スコットが中心になって創設した組織であるそうだ。スコット社長が債権者に提示したモトラム社再建計画、文持し資金的な援助を与えているのは、ユダヤ人の金融マフィアだという噂も流れているが、真偽はわかっていない。

会場に大きな咳払いが響きわたった。立ち上がったフィリップ・コトラーが用意したメモを手にながらスピーチを始めたところだった。全員がコトラーの方を振り向いた。フィリップ・コトラーはよく通る声で、簡単に自己紹介をしたあと、用意したメモを読み上げるようにして早口で話し出した。通訳無しの早口英語だけに一語でも聞き漏らしてはなるまいと、日本の代表者たちは必死でフィリップ・コトラーの話に聞き入っている。

「半導体は御承知のように原油と同様に産業活動にとっては必要不可欠な産業の原材料 であります。原油は生産量・供給量・価格とも見事な統制のもとに安定的に維持されていることはこれも先刻御承知のことかと思えます。翻^{ひるがえ}って考えますに、我々が世界の産業活動を支援するために供給している半導体はどのような状況におかれているか、これも出席されている皆さんが先刻御承知の通りであります。価格も供給も、従って生産も全く無秩序な状態におかれ、このために私ども半導体メーカーは大きな利益を失っているのです。私どもは秩序を回復させなければならぬのであります。価格や生産や供給それに技術開発や設備投資など、半導体の生産とマーケットのすべてについて、抜本的で公正なルールと秩序を作ること、それによって私ども共通の利益を守り、ユーザーに対して生産と価格の両面で秩序ある製品の供給を保證すること、それらについて率直な意見交換を行うことが今回のセミナーに皆様をご招待申し上げた理由であります」

国際的なカルテルを結ぼうではないか、そういう主旨の演説だった。フ

イリップ・コトラーの演説は大胆というべきか、これは確かに率直なカルテル組成の提案だった。

ときおり東洋電気の寺坂社長がかたわらに座る日興製作所の坂本社長の耳元で何事かささやいているのは、フィリップ・コトラーの喋っている内容を確認するためのものであるらしかった。老人の耳には早口の米語は聞き取り難いようである。

演説を終ると、フィリップ・コトラー社長はにこりともせず自分の席に戻り、ウィリアム・スコットの方を見ながらうなずいた。スコットは会場に座っている一人一人の顔を見渡してから、今度はイギリスのローランド社のダニエル・ハドソン会長を促した。ローランド社は超LSIを始めとした半導体素子、とくに論理素子を組み込んだ特殊メモリーボードの開発で最近めきめき業績を上げていることで注目されていた。ケンブリッジ大学出の秀才である長身のダニエル・ハドソン会長はゆつくりと立ち上がり、演壇の前に立つとこれも用意したメモを読み始めた。どうやら欧米の半導体メーカーの首脳たちは綿密な打ち合せを行った上で、今日の会合に臨んでいることは間違いなさそうだ。

ダニエル・ハドソンの演説は世界の半導体の現状がどうなっているのか、主要メーカー別の生産と販売の状況、したがって各社別のマーケット・シェアリングの状況、さらに今後の製品毎の需要見通しなどを詳細なデータを上げながらゆつくりとした口調で話を進めている。演説のなかばで、コンファレンス用の資料が初めて出席者に配られた。ダニエル・ハドソンが手にしているものと同じデータを示したペーパーである。資料が全員の手に行き渡ったことを確認すると、ダニエル・ハドソン会長はそれをあとで回収しますといった。

どんな手段を使って調べたのか、工場別・製品別に生産量が一週間毎に調べ上げられているほかに、研究テーマ別の予算額が、これもドル・ペーソと各国通貨ベースの数字が併記されている。それにメジャーの半導体メーカーだけでなく、ここにはアウトサイダーの生産量も詳細に示してあった。半導体の生産はとても複雑でこみいっている。たとえば1メガビットRAMにしても、数え方によっては百種類を超える製品群になる。それを

ダニエル・ハドソンは手際よくグループピングしながら、全体として半導体の国際的な生産の現状がどういう具合になっているか、見事に説明してみせた。

「日本の半導体メーカーのシェアが異常に膨らんでいることが、このデータによって理解できると思います。しかしながら研究開発投資では近年急速な改善が認められるものの米国の平均的投資額に対して、ワンポイントの差が認められる。これに対して設備投資額では桁違いの値を示している。つまり日本の企業は研究開発には熱心ではないか、生産力の拡大にはとても熱心であることが理解できると思います。そこに半導体市場に混乱と紛争が生ずる原因を認めることができますのであります」

現状報告というよりは、ハドソンが喋っている内容は日本告発演説といった方が正確であるかも知れない。が、話し方は淡々とデータを分析し、それを組み立て直しながら話を進めるといふ巧みな論理の展開のさせかたをしている。異議や疑義を差し挟む余地のない整然とした話し方である。出席者たちは配られた資料に示されたデータを照合しながらハドソンの話を熱心に聞いている。

「このような現状から判断しますに、国際市場におけるもつとも妥当と思われる半導体のシェアリングは日本が二十パーセント、米国とヨーロッパ（がそれぞれ四十パーセントずつを分けあうこと、これが半導体の市況を安定させ、無理なく供給をユーザーに保証するうえで、最善で望ましい協定の姿ではないかと思われるのであります。これらの点に関しては、現状認識を互いに共有したうえで、明日以降の討論に委ねたいと考えます」

さすがに日本の代表のなかから異議が提起された。頭っからシェアリングの話はないだろうというのか、日本代表の抗議の主旨だった。

東京通信機の内藤正好社長は興奮で顔を真っ赤にしながら、シェアリングに言及した部分の発言を撤回するように求めた。セミナーは序の口から険悪な空気だった。

「抗議の主旨は理解できた。ハドソン会長がお願いしているのは世界の半導体産業の現状がどのような姿になっているのか、参加者の共通の認識を培養することを目的とするものでありまして、ただいまのシェアリング

に関する発言は あるべき望ましい業界協調の姿 を述べたに過ぎないと思う。ハドソン会長の発言はそのように判断します」

ウィリアム・スコットはそういって、日本側の抗議をさらりと受け流した。

再びダニエル・ハドソン会長はスコットに促されて話をつないだ。話の順序にしたがってページをめくっていく。次のページには生産性と製品の歩留りに関するデータが示してあった。これも工場のライン別、製品別にやはり週間単位で統計が示されている。

三唱電気社長の天野典男は老眼鏡を掛け直し、もう一度数字を確かめてみた。製品の歩留りは昨年未から生産を始めたばかりの4メガビットRAMも含んでいる。いったいどうやって調べたのか。工場毎に彼らはスパイでも放っているというのか。これでは丸裸にされたも同然である。それほど、そこに示されてあるデータは正確だった。

日本の代表たちは背筋が寒くなってくるのを覚えた。東洋電気の寺坂社長の額にべったりと脂汗が滲んでいる。二時間あまりに及んだハドソン会長の演説はようやく終ろうとしている。内藤正好社長はデータを覗き込みながら大きな溜息を漏らしていた。日本の代表たちにはやはり報告の内容は衝撃的だった。

報告を終え、自席に戻るダニエル・ハドソンの後ろ姿を見ながら、ウィリアム・スコットが満足そうにうなずいている。

これでセミナー第一日目の日程はすべて終了したことになる。会合は米側が準備したシナリオに基づき、とどこおりなく進められた。会議中にはいっさいの疑問や疑義を差し挟むことを許されない雰囲気だった。その意味でスコット社長の議事進行の采配ぶりは見事なものであった。冒頭にフリップ・コトラーが演説した内容が、今回の会合の主旨を明確にしたものであるとするならば、ローランドのダニエル・ハドソン会長が行った世界半導体産業の現状報告、そこに示されたデータの詳細なこと、正確無比なことに日本の代表たちはまず驚愕し、そこにある種の飼喝に似たものを感じ取っていたる。

ウィリアム・スコット社長の顔には皮肉な笑いがこぼれていた。

「それでは本日の議事日程はこれですべて終了致しました。明日午前九時から当会場において、二日目の会議を行います。明日の会議ではさらに実りある成果を上げることができるよう期待します」 ウィリアム・スコット社長を先頭に米側の代表たちは会場からさっさと引き上げていった。日本の代表たちは例によって、東洋電気の寺坂信彦社長のスイートルームに集まっていた。窓を背にして椅子に腰を下ろしているのが内藤正好で、その前に置かれたテーブルを囲むようにして各社の社長がむっとりとした顔で座っている。

「凄い情報収集力ですなあ。正直いって驚きました」と誰かがいった。

「まったくだ」

東洋電気の寺坂信彦社長が唸るような声で答えた。

午後の会合で暴露した歩留りの問題が話題になっていた。各社とも4メガビットRAM新製品の生産歩留りが悪化しているため社外に対しては極秘で調査しているさなかにあっただけに、ハドソン会長がその詳細なデータを暴露したときは驚き以上の衝撃を受けた。各社社長の発言は微妙で慎重である。

「おたくもそうですか？」

「そうなんです」

4メガビットRAMはつい最近本格的に生産ラインに乗せたばかりだが、いずれも歩留りが五十パーセント前後という驚くべき状態にあった。その状況をダニエル・ハドソン会長のデータにはしっかりと示してあった。それも各社別・工場別に詳細に歩留りの比率を示してあった。日本の代表たちの思いは複雑だった。

他社のことはいざ知らず、少なくとも自社に関するデータについてはまったく正確だった。沈黙が続いていた。いずれにしても、国際的なカルテルを締結する前段の議論として、まず、現状に関して出席者全員が共通認識をもつこと、そのために提示しだのがあのデータだとハドソン会長はいつていた。それは日本の半導体生産の実態を丸裸にすることなのか。実際、丸裸にされたも同然だった。緒戦で強烈な先制パンチを食らった格好だ。

「要は明日以降だと思う」

「そういうことなんだろうね」

坂本社長のいったことに、東洋電気の寺坂が力なく答えた。

この状態では米側に一方的に押しまくられてしまう。どういった内容を盛り込んだカルテル組成の提案をしてくるのか。とりあえずはハドソン会長が口にしていた日本の適正シェアリングは二十パーセントといていたことが、日米攻防の焦点になるのか。明日以降の会議にどのように対応するのか、誰もが関心のあることだったが、この夜はさしたる議論もなく各社の首脳は早々と自室に引き取った。

翌日の午前九時。ウィリアム・スコット社長の開会宣言で二日目の会合の幕は切って落とされた。昨日と同じようにウィリアム・スコットが中央のチェアマンの席に陣どり、それを囲むようにして米国の半導体メーカーの首脳たちが座っている。日本代表たちは窓を背にして緊張した表情でこれから始まる会議を待っている。それをヨーロッパの代表たちが冷めた視線で見ている。

「あらかじめ申し上げておきたい。ここで選択できるのはひとつのことだけです。つまり我々の協調の精神を理解し、半導体市場の秩序回復のために我々の提案を受け入れるかどうか、その態度を決めることだけです。今日のテーマはその点に絞って議論を進めて行きたい、そのように考えています」

ウィリアム・スコットは正面突破を図ることを考えているようだ。会議の形式は出席者全員の合意に基づき、カルテル組成を締結することを提案している。

正面から日本の代表たちを恫喝まがいの脅しをかけて揺さぶる一方で、ときおり甘い餌をちらつかせてみせる。巧妙だった。ウィリアム・スコットに促されて、レオセン社のリチャード・レイ社長が立ち上がった。リチャード・レイ社長はだぶついた腰の廻りの肉をせりあげるようにしながら、演壇の前に立った。会場のなかをいちべつしてから話を始めた。「米国市場で起こっている不幸な事態を解決するためにも、新しい半導体市場の秩序

形成が必要なことは自明なことであります。ここで我々は、まず、紛争を解決するためのルールを提案したい。日本企業によって引き起こされた米国市場での不幸な事態も、我々の提案を日本企業が受け入れることによって、初めて解決可能だということを我々の共通認識として確認をしていた
だきたい」

リチャード・レイ社長は第一に世界市場を米州、欧州、日本を含む極東アジア、南アメリカ、アフリカ、中東、共産圏の七つのブロックに分けること、第二にブロック別に半導体生産を行っている各国各社別にシェアリング比率を決めること、第三に技術開発投資の制限、第四にアウトサイダーに対する対抗と制裁、第五に製品別の生産高と販売価格の決定の仕組みなど包括的なカルテル組成に関する提案を行った。

どれひとつとつても議論を呼びそうな内容だった。日本側の代表たちは予想された提案だったとはいえ、改めて周到な準備のもとに会議が進められていることに驚いた。日本側の代表たちが唯一答えることができるのは、イエスカノーだけだとウィリアム・スコットはいった。なんとも乱暴ないい方だったが、ここまで準備が進んでいるのであれば、それも当然であるかも知れない。しかし、シェアリングをどのように割り振るのか、価格決定のシステムはどのように決めるのか、これまでの実績に対する評価はどのようにみるのか、リチャード・レイの提案からだけでは判断できない。そこが議論の焦点になるはずだ。

リチャード・レイがいていた二十パーセントという数字が、彼らが考えている日本に対するシェア配分なのか。そうであったとしたら、これはとても受け入れられない提案である。坂本はそのことを先ほどから考えていた。米側の悦喝の材料はどうやら日本の生産の実態を握っているということのようだ。どうやって入手したのか。それを米国の代表が発表するのではなく、イギリスのローランド社のダニエル・ハドソン会長が発表したところに、この場合、微妙な政治的配慮が感じられる。

日本のシェアは250キロビットでは、約七十パーセント、さらに1メガビットRAMでは約九十パーセントのシェアを握っていた。それを三分の一の二十パーセントのシェアリングでは受け入れられないのは当り前の

話である。会合は午前中いっぱいをかけてリチャード・リーのカルテル組成に関する基本骨子の説明が続いた。

昼食を挟んで中断していた会合が再開されたのは、一時きっかりだった。会議場の内部は緊張が極度に高まっていた。日本側は会議が中断している合間に、対応策を協議した結果、あの提案ではとても受け入れ難いと冒頭に日本側を代表して東京通信機の内藤正好社長が発言した。

日米の間で本格的な議論が始まったのはこの段階からであった。

日本の代表たちは特別綿密な打ち合せを行ったうえで、米側の提案に反論を加えているわけではないが、それぞれが提案の内容に疑問を提起する形で、反論を加えている。一見、日本側の代表たちは勢いづいているような感じだった。



ウィリアム・スコットは日本が米側の提案している協定の内容を受け入れるならば、反トラスト法違反の提訴を取り下げること、また、シェアリング問題に関しても納得がいくまで議論を詰めた上で決定したいと、譲歩とも受け取れる発言をしたりもした。その一方では米国の日本企業で起こっているスト騒ぎを收拾できるのは我々だけだとい

ったりもした。あのスト騒ぎを背後で扇動していたのはこの連中だったのか。米側代表は意図してそのことを口にしたようだ。硬軟おりませた巧みな揺さぶり方である。

提訴撤回の発言に東洋電気の寺坂社長など一部の日本代表に動揺が起ったが、日興製作所と三唱電気は逆に攻勢に転じた。ことに日興製作所の坂本は強硬な姿勢を貫いた。それを各社の社長たちは驚いた顔で見ている。日本側の代表たちは坂本に引きずられる形で、次第に抵抗の姿勢を強めていった。とてもではないが米側がいつているようなことは受け入れ難いと

思われたからである。それにもうひとつ、世界のコンピュータの巨人と呼ばれているINB社の代表が副社長クラスの間しか派遣していないこと、それにATC社はこのセミナーに代表すら派遣していないことも、日本側の代表たちを強気にさせた理由だった。

日米の話合いは平行線だった。そのやりとりをヨーロッパの代表たちは冷静に聞き入っている。全体を合わせてもわずか十パーセントにも満たないシェアしか握っていない欧州の連中にすれば、棚ボタ式に膨大な市場が転がりこんでくる仕掛になっているのだから、ここで特別米側の提案に異論を挟む必然性はない。どのように転がったとしても、ヨーロッパの連中にすれば悪い話ではないのだから高みの見物とばかりに日米のやりとりを興味深く見守っている。

再び三唱電気の天野典男社長が演壇に立って、激しい調子で反論を加えているところだった。続いてハリウス社のマックスウエル・ペリイ副会長が立ち上がって再反論を加えた。マックスウエル・ペリイ副会長はハリウス社の実力者で、32ビットマシンの機械言語の権威として世界的に名の知られている人物だ。政治的な判断力からいえば、いまひとつという印象なのだが、日米のこみいった議論にひどく興奮していた。細身の軀をリズムカルに揺すりながら話すのが癖のようだ。

「我々は日本側の同意を求めているのではないし、日本に対して参加の機会を与えているのに過ぎないのです。我々は善意なのであります。日本の生産は日本の企業家たちがどのようにもがこうが、すでに我々の管理のもとにおかれているという冷徹な事実を明確に知るべきであります」

マックスウエル・ペリイ副会長はそこで驚くべきことを口にしていった。4メガビットRAMの生産で、原因不明の生産停滞を引き起こしていることと関連して、それは我々が日本の工場の生産をコントロールする能力を持っているからだと言ったのだ。

異常な歩留りの悪さは生産技術に原因があったのではなく、生産工程に第三者が介入した結果によるものだったのか。いったいどのような手段で……そんな魔法が使えるのか。それをコントロールする手段を我々は握っ

ているのだとマックスウエル・ペリイ副会長はくりかえしていった。しかし、マックスウエル・ペリイ副会長のいつていることはけけおどしではなさそうである。これはなにかありそうだ。確かに各社の工場で起こっている事態と符合するところがある。

寺坂が立ち上がり、暫くのあいだ休憩が欲しいと要請した。

真つ赤な夕日がシャム湾の海面を照らしている。この季節には珍しく水平線上に雷雲が浮き上がっていた。スコールがやってきそうな雲行きだった。パタヤビーチの水平線上に浮かぶ島影は今日に限って見えなかった。

2

久美子は一ヶ月ぶりで帰宅した夫の蓮田^{はすだ}勇雄を慌^{あわ}ただしく送り出すと、いつものように掃除やら洗濯など家事がひと区切りしたところで、サンルームのかたすみにセットしてある32ビットパーソナル・コンピュータの前に座り、スイッチをオンにした。

長男の享が幼稚園から帰るまで二時間あまりのゆとりがある。長女のマドカは機嫌よくリビングに置いてあるゆりかごのなかで遊んでいるのが、サンルームからガラス越しに見える。午後から夫の母が孫たちの顔を見たいと、訪ねてくることになっている。機嫌のよい声で待っているとは答えておいたものの、正直いって憂鬱なことである。

パーソナル・コンピュータは軽いアクセス音を立てながら相手呼び出している。そう待たされずにディスプレイ上にメッセージが現れた。パーソナル・コンピュータは電話回線で日興製作所の技術開発部と結ばれている。画面上に仕事の手順が明示された。それをひとつひとつ確認すると、上手にキーボードを操りながら久美子は難解なコンピュータ言語の解読に取り組み始めた。こうしているときに、近ごろの久美子にとって最も充実した時間だった。

退職してから久美子は、もといいた職場の日興製作所の技術開発部と外部嘱託社員の契約を結び、コンピュータ・プログラムのデバッグ、つまり出版の手順にたえていえば、印刷屋から上がってくるゲラ刷り原稿の誤植

を校正するような仕事を引き受けていた。今日もパーソナル・コンピュータは元気よく動きだした。画面いっぱいプログラム・リストが表示されている。一万ステップに及ぶ長大なプログラムである。プログラムに論理的な間違いがないか、あるいは単純な表記ミスはないか、それを見つけて出して訂正するのが仕事だ。長女が生まれて暫く休んでいた仕事を最近になって再開したばかりだった。

もともとがコンピュータのプログラマーであるだけに、慣れた仕事である。そしてなによりも魅力的なのは在宅のまま仕事ができることだ。さしてカネになるわけではないし、夫の蓮田は久美子がそうした仕事を引き受けていることをあまり気持ちよく思っていないようだったが、こうやって仕事を引き受けることが唯一の社会とのつながりを持てることであり、それにプログラマーは久美子の性分にあっていた。

```
E:\data\H8C>e:
E:\data\H8C>cd e:\data\h8c\
E:\data\H8C>del err.txt
E:\data\H8C>cc38h.exe -cpu=300ha -include=e:\data\h8c e:\data\h8c\st1\ledtest1.c 1>err.txt
H8/300H C COMPILER(Evaluation software) Ver.1.0
E:\data\H8C>type err.txt
E:\data\H8C>|38h startup,ledtest1 -output=ledtest1 -library=e:\start=P(200) 1>ledtest1.lst
E:\data\H8C>c38h ledtest1 1>>ledtest1.lst
```

だから夫がどんないやみをいおうが、家事や子育てに追われていようが、決して仕事を止めるつもりはなかった。久美子はディスプレイに表示されたプログラム・リストを見ながらプログラムの全体の構造を検討してみた。いまいちでき上りが悪いプログラムだ。ここも直したいと思うし、あそこも直したいと思う。できることならば、コンセプトそのものを再検討してみたい。しかし、久美子に求められているのは、プログラム言語記述の間違いを訂正すること、プログラム自体に手を加えることは許されていけない。久美子は手順よくプログラムのミスを発見しては訂正する作業を進めていた。

久美子は作業の手を休めて、昨日の夜、蓮田がいつていたことをふつと考えた。

歩留りが悪化している原因がまだよくわかっていないらしい。蓮田は大部分工場に派遣されてから一ヶ月にわたって原因調査を進めていたが、決定的な原因を掴めないでいるようだった。半導体の生産は完璧に自動化され

ている。だから人開が犯した誤りというよりは、問題は生産システムに原因がありそうなことだけはどうかわかった。しかし、その先がわからないで調査は立ち往生しているようだ。

最近の超LSIの生産は作業能率を高めるため回路図を分解し、これを通信回線で工場に送り、さらにこれをコンピュータに登録してある標準セルにつなぎ、CADと呼ばれるコンピュータ自動設計で、要求仕様に沿って設計・生産する仕組みをとっているのが一般的になっている。歩留り悪化の原因調査では原材料であるとか、生産工程であるとか、ハードにかかるといふ問題はすべて調査しているはずである。そうだとすると、問題はこうしたソフト上に問題があるのではないか、と思える。そのことを蓮田に聞いてみた。蓮田は不機嫌な顔をして否定的に答えた。

三唱電気の場合はブロック化して作られる回路図は国内外各所の研究所から衛星を利用した通信網で、相互にデータ交換を行いながら設計作業を進めている。複雑な回路をいわばブロック化し、ブロック(マイクロセル)を組み合わせることで、パーソナル・コンピュータなどの頭脳部分になるマイクロプロセッサや高速演算用のデジタル信号プロセッサ、画面処理プロセッサなどの回路をCAD装置で分解し、セル化するシステムを、比較的早い時期から採用している。微細で複雑な構造を持つ4メガビットRAMでも、構造が立体化されていることもあって、マイクロセル化の方法で設計している。

つまり回路図のデータ・ベースを構築することで、半導体設計の省力化を図り生産性を高めるのが狙いで開発された生産システムである。とくに最近では半導体の高集積化が進むにしたがって、ユーザー仕様で生産するカスタム製品の比率が高くなってきているので、このシステムだとデータ・ベースに蓄積された数多くのマイクロセルの中から必要な機能を持つセルだけを選び出し、CAD装置上で一個の半導体にまとめ上げることができるわけだ。

いずれにしてもデータ交換やデータ・ベースを利用する上で、通信システムを利用する頻度ひんどが高くなっている。これに問題はないだろうか。久美子はそのことを考えていた。生産システムやハード上に問題がないのだ

とすれば、通信システムをもう一度調べてみる必要があるように思える。最悪のケースを考えるならば、ハッカーまがいの行為で通信回線に介入、データを改造することだって、技術的には不可能ではない。

久美子は興奮を抑えながら机の上にノートを広げ、回路図の設計から組立加工に至る半導体の生産工程を書き出し、それを詳細に検討した。

久美子は次第に自分の考えに確信を抱くようになっていた。三唱電気には東京本社のほかに名古屋、京都、千葉、神奈川などにブロックと呼ばれる半導体回路図の設計を行っている開発チームが分散配置されている。さらに、米国にはヒューストン、シリコン・バレー、ヨーロッパではパリなどにそうした研究開発チームを配置している。それぞれが得意分野を担当し、通信回線を利用して送られてくるデータは神奈川県中央電子研究所に設置されている大型コンピュータでデータ・ペーシ化される。工場では本社から送られてくる生産計画に基づき、必要なデータを中央電子研究所のデータ・ベースにアクセスしてとりだし、要求仕様に基づいて工場のCAD装置で設計、生産することになっている。いずれも通信回線を利用しなければ、成り立たないのがこのシステムだった。久美子もシステムの概要だけは知っていた。

悪意がある人間であるならば、通信回線に介入して、データを改竄かいぜんすることだって考えて当然だ。それにデータ回線に介入することは、周波数とパスワードを解読できれば造作もないことだ。各社の利用している衛星通信の周波数は公開されているのでそれはわかつている。

問題はパスワードである。これは非合法の手段で入手したに違いあるまい。いや、パスワードの管理は、それほど嚴重ではないのだから、別に特別な手を使わなくても、それを入手することは難しいことではない。このシステムはセキュリティに関してはあまりにも無警戒に作られている。

回路図の一部にちょっとした加工をすること、たとえばコンデンサーの位置を図面でほんのちよつと変えてやるだけで十分だ。これで大量の不良品が発生する。その上で、そうした操作の結果を再び正常な形に見える図面に戻しておく。この方法ならば、生産を間接的にコントロールすることが可能である。悪意ある人間が通信回線に介入している可能性は大きい。

ではないか。そう考えると、歩留まりが悪くなっているという現実とのつじつまがあうように思えてくる。

こういうことは案外、当事者にとっては盲点になっていることがある。むしろ久美子のように現場から離れ、事態を客観的に見る立場の人間の方が、問題の所在を発見できるというものだ。通信システム……これは意外に盲点であるのかも知れない。

久美子の手が自然に電話に伸びていた。まだ蓮田は、今日は、東京本社で打ち合せの会議をやっているはずだ。

蓮田は会議中だったが、オペレータが気をきかせて、会議室にいる蓮田を呼び出してくれた。

「なんだね……」 相変わらず不機嫌な声だった。

周囲の人間に気兼ねでもしているのか、ことさら押し殺した低い声を出して蓮田は電話に受け答えをしている。久美子はなんだか گرفتりの気分になった。それでも気を取り直して、先ほどから考えていたことを手短かに話した。だが、蓮田はほとんど相手にしないような受け答えだ。ともかく職場に電話をかけてくること自体迷惑だといわんばかりの対応の仕方だった。

電話がぷつんと切れる音を聞きながら久美子は、どうしようもない怒りのようなものがこみ上げてきた。蓮田に対する感情が次第に化石化していくこと事態、久美子はそれを冷静に見極めようとしていた。

ふっとリビングの方を振り向いたら、マドカは母親の視線を認め、可愛い笑いを見せた。それを無視して、久美子は再び32ビットパーソナル・コンピュータのディスプレイに立ち向かい作業を始めた。

3

「通信回線か……」

蓮田は同じ言葉をくりかえしながら、弾んだ足取りで会議室に向かった。

会議室では先はどから矢頭企画本部長が中心になって、半導体の不良品大量発生にどう対処するか、その技術的な検討を行っていた。検討項目は

全部で百二十項目に及ぶ。まだ、三割程の項目を潰しているに過ぎない。今日は、4メガビットRAM生産について、大分工場に導入されたステッパと呼ばれる超LSI量産装置に技術上の問題がないかどうかを中央電子研究所の研究者や現地工場の責任者など十数名が参加して検討している最中だった。

蓮田はこの会議では事務局の立場にあつたので、あまり発言する機会はない。会議室に戻ると、ドア近くの末席にさつと腰を降ろした。

ステッパとは大きく描かれた物理的回路図を光学的に縮小し、感光剤の塗布されたシリコンなどの半導体材料上に逐次移動しながら露光する装置である。しかし、その精度は縮小するためのレンズなどの光学機構と、それが露光できる範囲が狭いため、その露光範囲を逐次精密に移動することのできる機械的メカニズムによって左右される。使用する光（電磁波）について言えば、より短い波長を使用すれば、より正確に対象物に映像を投影できる。そのため、より短い波長の光（電磁波）を得るために「シンクトロン」という装置からの放射光が利用され始めていた。

しかし、それを使って、一回に電子回路を対象の感光剤が塗布されたシリコン基板に投射できる範囲は、二十五ミリ角程度である。「シンクトロロン」から得られる短波長を使用すれば、微細な電子回路を投影できるので、問題は生産性向上のために大口径化するシリコン基板上にステッパで順次、必要とする電子回路を正確に露光することだった。

その際、わずかな狂いも生じてはならない。でき上がった製品が不良品となってしまうからだ。位置決め精度は ・ ミクロン。一ミクロンは千分の一ミリだから、想像を絶する微細加工技術である。それを一秒以下の速度で移動しながら、順次、大口径のシリコン基板上に回路図を、露光し、描いていく。だから最終製品の歩留りを決定するうえで、位置決めが最大の技術上の問題であった。大分工場は、こうした一連の装置を導入し、試作期間を含め一年余を費やしていた。これまでは少なくとも問題がないと報告されていた。しかし、今日の検討会では歩留まり低下から徹底的に調べなければならぬということになった。大分工場の責任者からステッパの使用状況や作動環境やクリーン・ルームの精度データなどが詳細に

報告された。一方、中央電子研究所の研究者からステッパの移動位置決め精度の限界値など、技術的なデータが示され、無理のない使い方がされているかどうかなど、詳細な検討が行われている。蓮田は発言すべきかどうか迷っていた。久美子がいつていたことが、どうやら問題の本質を突いているような気がしてならない。

宇宙通信回線をハツカーしてデータに間違った記述を施す。技術的にも実際的にもまったく可能な方法である。だが、それを誰が意図的にやっているのか、それはひとまず別な角度から調査するにしても、これはどうしても一度は検討してみなければならぬ問題である。

検討会ではステッパに焦点を絞りこんで、議論が進められていた。中央電子研究所の研究者の一人はそのことに確信を持っているようで、幾つかの疑問点を電子黒板に書き出し、それをひとつひとつ具体的な例をとって証明することに懸命になっているところだった。なんだか、それに水をさすような気がする。相手は研究所の三年ほど先輩の主任研究員である。蓮田はちよつと迷ったが、電子黒板を背にして座る矢頭に発言の許可を求めた。矢頭は少し怪訝な顔をしていたが、すぐに発言を許可した。

蓮田の頭のなかではこれから話そうとしていることの問題点が十分に整理されていなかったが、話しているうちに次第に熱をおび始めた。

「我々はなんの疑問も抱かずにデータ通信システムを利用していますが、この送発信システムを一度再検討してみる必要があるのではないか、私はそう思うのです」

蓮田が最初に取り上げた問題は電子回路図などのデータ交換のやり方やデータ送発信システムのことだった。これまでの議論の中身とだいぶ違うテーマである。

参加者のほとんどは蓮田がなにをいい出すのか、と会議室には少しばかり白けた空気が漂っている。嫌みの咳払いがした。蓮田は構わず続けた。データ送付の方法に問題がないか、誰かがデータを意図的に改竄する書きこみをやっている可能性はないか。データ交換の送発信システムに問題がないかどうか、そうした疑問を提示したうえで蓮田は通信回線を使った生産システムをもう一度サンプリングによって調べてみる必要がある、とく

りかえし強調した。

久美子が抱いた疑問に、少しばかり理屈と装飾を加えて話をしているに過ぎないのだが、矢頭本部長は短く刈り上げた頭をぼりぼりかきむしりながら蓮田の話の話を聞いている。気分が高揚しているときの癖である。矢頭が蓮田の話していることに大きな関心を抱いていることは確かだ。中央電子研究所の同僚の一人か、蓮田の話を途中で遮ろうとしたとき、矢頭は怒声を張り上げ、逆にその発言を制止して、蓮田の話を続けさせた。

「確かに盲点だった」

矢頭は唸るようにいった。

検討会の議論の方向は、大きく変わり始めた。急遽、衛星利用回線のデータを改めて取り寄せ、どのようなシステムでデータのやりとりが行われているか、そのことの検討が始まった。安全管理はずさんである。パスワードはこの三年以来、まったく変えられていないこともわかってきた。それに通信回線に対する依存が極めて大きいこともわかった。半導体の生産はまさしくデータ回線の利用を抜きにしては考えられない仕組みになっている。それにしても、この種のデータ交換はまったく無防備な状態にある。

「でも、誰が……？」

出席者の一人がいった。

矢頭本部長は、その発言を無視し、とまかく通信回線のシステム全体のチェックを行うこと、発信元データを着信サイドで受け取ったときにデータが改竄された痕跡がないかどうか、そのサンプル調査を行うことをその場で命じた。

「とりあえずデータの送発信は磁気テープでやりとりしてみたらどうだろうか。手間がかかるのは仕方のないことだ」

磁気テープでデータ交換をやる場合、回路図を作成した側がデータをいったん磁気テープに記録、現地工場に郵送し、工場側はこれを再びコンピュータにかけて、ここからデータを呼び出し、利用するという形を取らなければならぬ。

それだけに馬鹿馬鹿しい手間と時間がかかることになる。すっかりオン

ライン・システムに慣らされているために、現場では大きな混乱が起こることが予想される。それに回路図は膨大なデータ量だ。それを記憶できるような大容量記録媒体があるのか、また、このやり方だと作業時間のロスも発生する。問題点が指摘され、その場合、どんな対応が必要とされるかなど、原因調査をめぐる検討会では活発な議論がかわされることになった。

同僚たちは慌ただしく動き始めた。その姿をみながら蓮田は、久しぶりに満足した気分になっていた。

4

ロバーツ教授の秘書から「午後四時にお待ちします」と、理恵が泊まるホテルに連絡が入ったのは、ニューヨークに戻って一週間が過ぎたときだった。

今日がその約束の日である。理恵はニューヨークのビジネス街にあるロバーツ教授のオフィスを目指し、タクシーを飛ばした。ニューヨークも厳しい季節はようやく峠を越したようで、春には遠いけれど、いくらか日も伸びているように思える。しかし、車窓に映るセントラル・パークはなお厳しい冬景色だった。

理恵はタクシーに揺られながらロバーツ教授のことを考えていた。モトラム社の劇的な倒産、それに続き反トラスト法違反で日本企業が摘発され、それに今度の反日暴動。外交交渉で問題の解決に当たろうとした日本政府の努力も水泡に帰した。ともかくモトラム社の倒産をきっかけに日米関係は最悪の状態に入っている。一連の事件の鍵を握っている人物、それがロバーツ教授ではないか、理恵は次第にそう思うようになっていた。いまだはその考えは確信に近いものになっていた。

どうしても、一度は会っておかなければならない人物だ。これからその人間に会えると思うと理恵は奇妙な興奮を覚えた。しかし、あれやこれやでロバーツ教授に会うのにまるまる一週間待たされたことになる。

確かにロバーツ教授は名の売れた一流の学者には違いないが、いかにももったいぶったやり方をするものだ。最初、シオリからチェンバレンを通

じて面会の申しこみを行ったが、「ロバーツ教授はとても忙しいので、非常に残念なことです。皆さんにお会いする時間はありません」という答えしか、ロバーツ教授の秘書からは返ってこない。しびれを切らしたチェンバレンは直接ロバーツ教授と電話で話したところ「ジャーナリストや日本の官僚には会いたくない」というのが面会を拒絶した本当の理由のようだった。

逃げているか、もともと猜疑心さいぎしんの強い人物なのか。なぜ警戒的になるのか。理恵にはますます疑惑の人物にみえてきた。

ロバーツ教授に対するインタビューの話は思わぬところから動き出したのだった。

たまたま東京の研究所に現地調査の現状を報告するため電話を入れたときのことである。理恵は野沢研究調査部長に例の論文を書いたロバーツ教授に会えずに困っていることを話した。野沢研究調査部長からロバーツ教授とは面識があると聞かされたときは、野沢の交友関係の広さに改めて驚かされた。

「彼ならば僕も知っている。東京から彼に連絡を取ってみよう。まあ、あてにしないで待っていてくれたまえ」

ロバーツ教授の秘書から理恵のもとに連絡が入ったのは、そんなやりとりをした二日後のことである。幾つか条件を付けた上で、木曜の午後四時に事務所で待っている、と返事が返ってきた。条件とは、事務所には理恵が一人でくること、理恵に話した内容は第三者に漏らしてはならないことの二つだった。理恵はあっさりと承諾した。

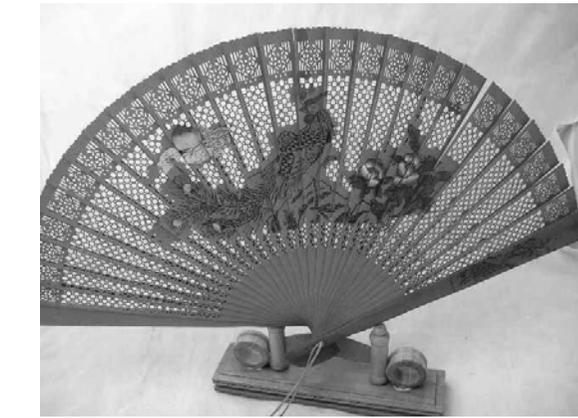
さらにロバーツ教授は秘書を通じて、その場でなにを聞きたいのか、事前に質問項目を提出するように求めてきた。それは昨日、ホテルのファックスでロバーツ教授のオフィスに送ってある。できるだけ刺激的な質問は避けて、一般的で当りさわりのないことを書いておいた。折り返しOKの返事が返ってきた。

ロバーツ教授は大学の研究室のほかにマンハッタンのビジネス街に個人事務所を構えている。そこが今日、会う場所として指定されたところだ。ロバーツ教授の秘書の話だと理恵が泊まっているホテルからタクシーを飛

ばせば、二十分程度の距離だといっていた。

マンハッタンの繁華街を通り抜けると、目的のビルが見えてきた。五番街をまっすぐに下ったワシントン広場のすぐ近くに目的のビルはあった。ニューヨークでも一等地である。こんなところに個人事務所を構えるロバーツ教授とはいったいどんな人物であるのか、高層のビジネスビルを仰ぎみながら理恵は改めて考えさせられた。

なかなか瀟洒シャウハシなオフィスだ。落ちついた雰囲気、高級サロンを思わせる作りだ。和風が好みなのか、仕切りに障子などが使われている。それを見ながら理恵はロバーツ教授が東京生まれであったことを思い出した。完全に個人事務所らしく、秘書のほかには誰もいないようである。ロバーツ教授のオフィスはひっそりとしていた。



秘書にロバーツ教授の執務室兼応接間に通された。理恵は珍しげに部屋のなかを見渡した。教授は東洋文物の蒐集が趣味なのか、壁際には中国や日本、朝鮮半島の民具やら書画骨董品が無造作に並べられていた。そのうちの何点かは年代物の陶器で、かなり高価そうにみえた。執務机の後ろの壁に飾られている日本画は明治時代の画壇の巨匠黒田清輝の人物画だった。書棚には日本語の専門書や中国語の専門書が並べられている。まるで東洋史を研究している学者の蔵書のような。理恵は緊張し、ロバーツ教授が現れるのを待った。

「お待たせした」

ロバーツ教授が落ち着いた足どりで、部屋に入ってきた。少壮学者の風貌を思い描いていたが、抱いていたイメージとはだいぶ違っていた。実業家の風貌である。紺のブレザーを上手に着こなし、襟元には洒落たネツカチーフを巻き付けている。なかなかの洒落者だ。歳よりは少し老けている感じだ。まだ四十歳代半ばだか、外見よりは若そうである。ソファに腰を沈めると、ロバーツ教授はゆったり足を組み、構えるようにして理恵の方を見ている。威圧的な態度だ。

どう切り出せばよいか。ロバーツ教授は理恵の言葉を待っているようだ。じいっとして構えている。

「……教授の書かれた論文、私は大変興味深く拝見しました。とくに教授は論文のなかで現在の日米関係を正確に予言していた、と私には思えるのですが？　そこで幾つか質問を許していただきたいのです」

「結構です」

ロバーツ教授は大きくうなずいた。滑り出しはまずまず順調だった。

理恵は論文を書いたその動機がなんであったのかを単刀直入に聞いた。

ロバーツ教授は少し考えこんでいる。暫くの沈黙のあと、

「確かに似た状況にあるが、それは偶然というものでしょうね。私の友人にもあなたと同じ意味のことをいう者もいますが、そういわれて驚いているのは私の方です」

そう前置きをしてから、ロバーツ教授は論文を書いた動機と、その背景を静かに話し始めた。今度の事件と関係づけて論文のことに触れられたことを、ロバーツ教授は心外に思っているらしく、事件との関係を全面的に否定した。

「米国市場は外国の資本によって、蹂躪じやうりやくされている。とくに八十年代の後半に入ってからその傾向が強くなっていますね。そのことに我々は危機感を抱いていた。それがプロジェクトを作った理由です」

外国資本との協調の方途を探ること、その協調の道が閉ざされた場合、自国の市場権益を守るにはどうすれば良いか、そのことを考えるのがプロジェクトの課題であったと、ロバーツ教授は付け加えた。

「残念ながら我々の研究の結果では、外国資本に対しては一定の政策的な制限を加えなければならぬという結論になった。それはご承知ですね。大変残念なことです」

「スポンサーは商務省のようですね」

「そのとおりです。序文に書いてあったように『米国市場の防衛』と題する論文は商務省の委託研究としてコロンビア大学の国際経済研究所が引き受けたものでした。だからといって商務省は研究の内容をどうせよとか、こうせよとか注文を付けてきたわけではない。第一、スポンサーが注文を

つけてくるようでしたら我々は仕事を引き受けることはなかったでしょうね。あそこに書かれていることは我々自身の考え方と判断が示されているのです」

ロバーツ教授はそういった。

とぼけているのではないか。なんだかはぐらかされたような気分になってくる。

考えれば考えるほど、あの論文は現在、日米間に起こっている事態の背景なっている、その理論的根拠に酷似している。やはり教授の書いた論文が今度の事件のシナリオに採用されているのではないか。理恵はそんな疑問を再びぶつけてみた。

「考え過ぎでしょうね」

ロバーツ教授は軽く一蹴した。それでも理恵はなお、執拗に食い下がった。どうも二人のやりとりはスレ違いに終りそうな気配だった。

ロバーツ教授の論文がなぜ議会図書館のデーク・ベースから削除されることになったのか、そのことを理恵が聞いたとき、ロバーツ教授は突然大きな声を上げて笑い始めた。

「そうすると、なんですか、私たちが書いた論文があなたのいう 事件のシナリオとして採用された。ところが、その論文が日本人の目に触れるのではまずいということで、論文をデーク・ベースから削除した……そういうことですか。でも、考えてもご覧なさい、そういう性格の論文であったとしたら最初から議会図書館のデーク・ベースなんかに掲載せやしないではないですか。私には少なくともそう思えますが……」

ロバーツ教授はいかにもおかしそうに笑い続けている。教授のいつていることは確かにそのとおりだ。当然、そのことは考えたのだが、どうにも納得ができないからこうやって直接確かめようとしているのである。

最も気になること、それはロバーツ教授と米国半導体業界との関係である。野沢と電話で話したとき、はっきりは言わなかったが、非常に近い関係にあるようなことを言っていた。ロバーツ教授は米国半導体業界の代弁者ではないのか。

「それでは、今後の日米関係についてですが、教授はどんな見通しをもつ

ておられるかお話しただけませんか」

「難しい質問ですね……残念ながら我々はまだ回題を解決する解答を持っていないのです。むしろあなたの意見を伺いたい。野沢氏の紹介だと、あなたはこの問題の専門家だと聞いています。せっかくの機会ですから……」質問する側が逆に質問された。ロバーツ教授は巧みだった。

アメリカでの調査を通じて固まった自分の考えはある。理恵はそれを話すべきかどうか躊躇した。ロバーツ教授が再び理恵を促した。

理恵は自分の考えていることを話すことにした。問題はパタヤビーチ・セミナーとの関連。「パタヤビーチで開かれた会合、なんでもモトラム社のウィリアム・スコット社長が主催した会合だそうですね、今度の一連の事件の謎を解く鍵はあの会合にあるのではないかと私は考えています。結論を先にいわせてもらえれば……日本企業を反トラスト法で摘発したことも、さらに日系企業で発生したストライキ騒ぎも、これはいずれも日本を揺さぶることに目的があつたのではないのでしょうか」

「なるほど、それで？」

「教授の書かれた論文には、日本をどうやって叩くか、その方法を含めて詳細に書かれています。それでは次の段階、つまり事件を仕掛けた連中が、どんな手を打ってくるか、そこがわからないで悩んでいたのです。教授の書かれた論文には、そのことは触れていませんでしたが、日本を揺さぶつたあとに甘い餌をあたえる……それがストーリーではないか、私にはそう思えるのです」

理恵は挑発的ないいかたをした。そして注意深くロバーツ教授の反応を見守った。

教授の反応からは、なにも読み取ることはできない。しかし、ロバーツ教授が事件に深くかかわっている……それは確かなことのように思えてくる。軀がこわばってくるのはどうしようもないことだ。理恵の脇の下に冷たい汗が流れた。

「そうでしたかね……」

ロバーツ教授は鷹揚あつやうにうなずいてみせた。

「ウィリアム・スコット社長の呼びかけで、世界の半導体企業の首脳がパ

タヤビーチで会合を開くことにする。彼にとっては仇敵、日本のメーカーの首脳たちも招かれている。それは驚きでした。そこでなにを話し合ったのか、私には大変興味深いことです。教授も当然パタヤビーチ・セミナーのことはご存知ですね。あるいは教授自身がセミナーを計画した一人ではなかったのか……。教授、いかがでしょうか」

いったん決意すると、意外にもすらすらと言葉が出て来るものだ。ロバーツ教授は一瞬戸惑った顔をしたが、興味深そうな顔をして理恵の話に聞き入っていた。

「日本企業を反トラスト法違反で摘発するその一方で、逆に日本を含む国際的なカルテルを締結すること、それが今度の事件の最終的な目的ではなかったのか。問題をそう考えますと、事件の全容がみえてくるように思えるのです」

理恵は一気に喋った。そのことは米国で調査を進める過程で得た結論である。理恵には確信があった。

「あなたの推理能力には感心した。ストーリーとしては大変面白い。全く考えられない話ではないように私も思う。しかし、あなたが立てた筋書きには少し矛盾があるように思うのです。たとえば……」

ロバーツ教授はそこで、いったん言葉を切った。理恵がすかさず聞き返した。

「たとえばというと？」

「そう、あなたがいうように、日本企業の活動を封じこめることに今度の事件の狙いがあるとすれば、米国の半導体業界か日本の企業に国際カルテルの締結を呼びかけるでしょうか。矛盾したことだと思えます。彼らはそんなことを考えないと思う」

「と、いいいますと？」

「つまり、あなたのストーリーで説明しようとする、米国市場から日本企業を放逐するだけで、彼らの目的は達成できるのではないか。日本企業に対する報復は、それで充分効果をあげることができる。パタヤビーチでなにが話し合われたかは別にしても、問題は米国市場で米国の半導体業界がマジヨリティを回復することにある。あなたのストーリーで考えたと

しても、彼らの終極の目的というか、結論はそういうことになるのではないでしょうか」ロバーツ教授は理恵の言ったことを全面的に否定した。教授かそのことになんらかの関わりを持っているのだとしたら、国際カルテルを結ぶ陰謀をそう簡単に認めるはずはない。理恵には予想された反論だった。しかし、確実な反応が出てきたように思える。ロバーツ教授は日本企業を米国市場から放逐するとか、日本企業に対する報復はそれで充分だといっている。それにロバーツ教授はパタヤビーチ・セミナーのことも口にした。

理恵はさらに挑発的なことを幾つか畳み掛けるように質問した。

「教授もやはりパタヤビーチ・セミナーのことをご存知だったのですね？ 会合は先週末に終わったそうですが、あそこでなにが話し合われたか、ご存知ですか」

「ええ、知っていますよ。半導体業界の協調問題について話し合ったそうです。しかし、またも日本側の抵抗にあつて、セミナーは失敗に終わったと聞いています」

「日本側の抵抗ですって？」

理恵が聞いた。

「そのようですね」

「パタヤビーチでなにが話し合われたか、教授の考えをお聞かせ願えないでしょうか。たとえば、そこでマーケット・シェアリングについて米側がなんらかの提案をした。ところが日本側にしてみれば、とても受け入れることのできない提案だったとする。そこで日本側は米側の提案を拒否したのではないか。それで対立した……そういうことがパタヤビーチのセミナーで起こったとは、考えられないでしょうか」

「あなたはユニークな考え方をする女性だ。その想像力の豊かさには敬服する。ただ、残念ながら私自身があこのセミナーには出席していないので、あなたの質問に答える立場にはないのです。敢えてコメントをするとすれば、あなたがいうようにマーケット・シェアリングも当事者にとっては興味深いテーマであつたのではないか、と思います」

議論はようやく噛み合ってきた。ロバーツ教授はパタヤビーチでマーケ

ット・シェアリングが話し合われたことを認めた。どういふ配分を米側が提案したかはわからないが、ともかく日本側は米側提案を拒絶、話し合いはもの別れに終わったようだ。

そうすると、一連の事件は日本の企業を国際カルテルに引きこむための術策だったのか。米側は実に巧妙な手を使ったということになる。だが、日本側が米側提案を拒絶したとするならば、次の展開はどうなるのか。米側はまた別な手を考えているということなのであるのか。理恵はそのことをロバーツ教授に聞いた。

「米国の独占禁止法はあなたもご承知のように大変厳しい法律です。たとえば外国で結んだカルテルであったとしても、米国の反トラスト法では取締りが可能なのです。米国の半導体業界も当然そのことは知っています。ですからパクヤビーチでマーケット・シェアリングを話し合ったとしても、それを協定として締結するかどうか、そのあたりは彼らも当然距離をとっているだろうと思いますよ」

「マーケット・シェアリングを話し合ったとしても、そこで協定を締結するかどうかは別問題だとおっしゃるのですか」

「そのとおりだと思います。米国の経営者たちは独禁法に対しては慎重です」

ロバーツ教授はあくまで間接話法で話している。話していることはあくまで、想像というか、単に仮説をいつているに過ぎない。

言葉の選び方は慎重だが、その一方で理恵からなにかを探ろうとしているかにもみえる。ロバーツ教授との議論は微妙なやりとりで終始している。

「マーケット・シェアリングを話し合った可能性は少ないと思う。問題は異常に膨らんだ日本のシェアをどうするか。それが第三国の半導体産業を圧迫している事実がある以上、それに適切な対応をするのが、圧迫されている側の当然の権利だと思いますが……。そのことを話し合った可能性はある」

「それにしては日本企業を叩くやり方に異常なものを感じないですか。どうみても私には異常にみえるのですが……」

「この発端、つまり今度の問題は米国市場における日本企業のシェアが

異常に膨らんできたところにあつたのですよ。そのために米国の半導体業界は危機感を深めていた。モトラム社の倒産はその危機感に火をつけることになったのです。どう考えても日本のシェアは異常に高い。それが非合法の手段で確保したシェアだとすれば、これは米国の世論を刺激するのは当然だと思います。当局も世論の動向に無関心ではいられないでしょう」

教授は明らかに論点をぼかしている。パタヤビーチでカルテル組成の話合いがあつたかどうか、それを日本が拒否したとすれば、次の段階でどういうことが起こるのか。理恵はそのことをロバーツ教授に聞いた。が、ロバーツ教授は理恵の質問に直接には答えずに、日本企業の米国市場で市場占有率が異常に高くなった背景に、違法行為があつたこと、だから米国の日本企業に対する世論が厳しさを増しているのだ、と答えた。

ロバーツ教授はときおり時計をのぞきこんでいる。時間を気にしているようだ。時間が経つのは早い。約束は一時間だ。その時間が迫っていた。

「最後にお聞かせ願いたいことがひとつあります。よろしいですか？」

「あまり時間がないが、時間の許す限りいいですよ」

「米国の国益に日本が抵触するようなことをやったから、今度のような問題が起こつたのか、それとも別な理由があつたのか、教授はどちらだと考えられますか」

「どういう意味でしょうか。おっしゃる意味が私には理解できない……」

「米国は戦略国家です。戦略国家である米国は軍事力の基礎となる先端技術では絶対的な優位性を確保しなければならないと考えている。これまではどうにか優位性を保ってきた。ところが日本は米国の優位性を激しく揺さぶり始めた。これは戦略国家としては絶対に許せないことである……それが事件の背景にあるのではないか、私にはそのように思えるのです」

「だから日本を潰しにかかった……ということですか。私には極めて単純な理屈のように思えますね」

「ええ、そのことだけでしたら確かに教授のおっしゃるとおりです。日本は今度の問題で譲歩をし続けてきた。司法取引を提案したのもそのひとつだったと思います。それを米側はあっさり拒絶した。現段階では日本の企業は米国市場から撤退することさえ考えている。この状態が続けば、日

米は外交的にも安全保障の面でも決定的な対決を余儀なくされるのではないかと、と憂慮されています。日本の国際社会における位置、米国にとって日本は極めて重要なパートナーであることは、誰も否定しないだろうと思います。しかし、米国は日本をどんどん追い詰めていく。その理由はなんであるのか……です」

「……………」

ロバーツ教授は黙って聞いている。理恵は続けた。

「米国の国際戦略に最も協力的なのは日本なのです。先端技術の分野の日本の協力関係では、たとえば共産主義国家に対する先端技術の流失に関して、国際技術移動監視システムを創り上げたときも、また、見返りの全く期待できないSDIプロジェクトに対しては四十億ドルにのぼる資金協力をを行っているのも、日本政府が対米関係を配慮して政策決定したことは、教授もご承知かと思えます。また、貿易で黒字を出し、米国から非難を受けてきたけれど、しかし、その黒字の大半は米国の証券市場に流れ、社会福祉や年金などの資金として使われていることもご承知かと思えます。しかも、今のところ米国に投資した資金は、返済される見込みがないのです。それにもかかわらず、日本は呆れるほどに米国に従順なのです」

「おっしゃるように国際社会における日本は、日本人が考えている以上に重要な役割を果している。だが残念なことに日本人は、その発想のなかに戦略的な思考法を持っていない。日米に起こるトラブルはそうしたことに原因があるのかも知れません。とりわけ日本は巨大になり過ぎた……ということなのでしょうね」

「教授のいわれたことはよく指摘されていることですね。だからこそ米国は無自覚な日本を自己の管理のもとにおいておかなければならないと思ひこんでいる。一方、日本はそれを不遜なことだと感じてはいるか、不平もいわずに受け入れている。しかし、日本を米国市場から叩き出そうとしているのだから、これでは日本が反発するのも当然だと思います。日本を追いつめて、日本を米国から離反させること。果して、それが米国の国益に合致するものであるか、疑問に思えるのです」

「なるほど……いま起こっている事態は米国の国益にも反することだとい

われるのですね。大変ユニークな考え方だと思いますね。それで？」
ことをしたのではないか。

「もう一度うかがいますが、なぜ、そこまで日本を追いつめなければなら
ないのか、問題はその理由です。虎の尾を踏んだ、つまり米国の 国益
にまさるなにかに、日本が触れるようなことをしたというのではないか。そ
こに私は米国の国家権力を陰で操る 謀略集団 の影が見えてくるよう
なきがするのです。いかがでしょうか、教授」

理恵は自分の話していることに、恐しくなってきた。ついに 謀略集団
のことを口に出してしまった。

ロバーツ教授は椅子から立ち上がると、部屋のなかを歩き出した。壁際
に飾ってある能面を手にながら、ゆっくりと呟くようにいった。

「あなたは、ミスター野沢が評価しているよりは数段に優れた才能をお持
ちのようだ。すっかり感服した。だが、いまあなたがいわれたことは、あ
なたの調査報告のテーマの範囲を超えた関心の示し方のように私には思え
る」

「と、いいいますと？」

「賢いあなたには私がなにをいわんとしているか、わかっているはず
です。調査報告は日米の対立する 国益 をどのように調整すればよいか、論点
をその一点に絞って書かれた方があなたのためだと思いますよ。そうす
れば、あなたは素晴らしい調査報告書を日本政府に提出できることになる」

「それは忠告ですか、それとも警告と受け取ればよいのですか」

「どう受け取るかはあなたの自由です」

無表情なロバーツ教授の顔が、次第に能面のように思えてきた。今度の
事件はやはり仕組みられたものに違いない……そう確信を持つことができた。
理恵は取材に協力してくれたことに対する儀礼的な挨拶をしながら、ゆっ
くりと椅子から立ち上がった。

(つづく)